

研究会参加者 実践報告

子どもの姿

- ・3歳児
- ・保育所で話さない（家ではよく話している）
- ・表情が少し固い
- ・困っていることはあるが、じっとしている
- ・質問にはうなずくか、首を振っている
- ・友達のそばで同じ遊びをしている



具体的な援助・手立て

- ・質問するときは Yes、No で答えられる質問にする
- ・友達と少人数で安心できる関わりを増やす
(好きな遊びを数人で行う など)
- ・一緒にたくさん遊ぶ
- ・無理に喋らせようとしない
- ・みんなで大きな声を出す遊びを取り入れる
(しなくとも OK)
- ・保護者と連絡を密にとり一緒に見守っていく
(安心できるように)
- ・伝えようとする気持ちや思いを受け止め、保育者が言語化していく



なぜ？

- ・安心できない？
- ・自信がない？
- ・恥ずかしい？
- ・場面（選択性）減黙？

場面（選択性）減黙

特定の社会的場面（学校や職場など）で話すことができなくなる。

その後の様子・気付いたこと

様子

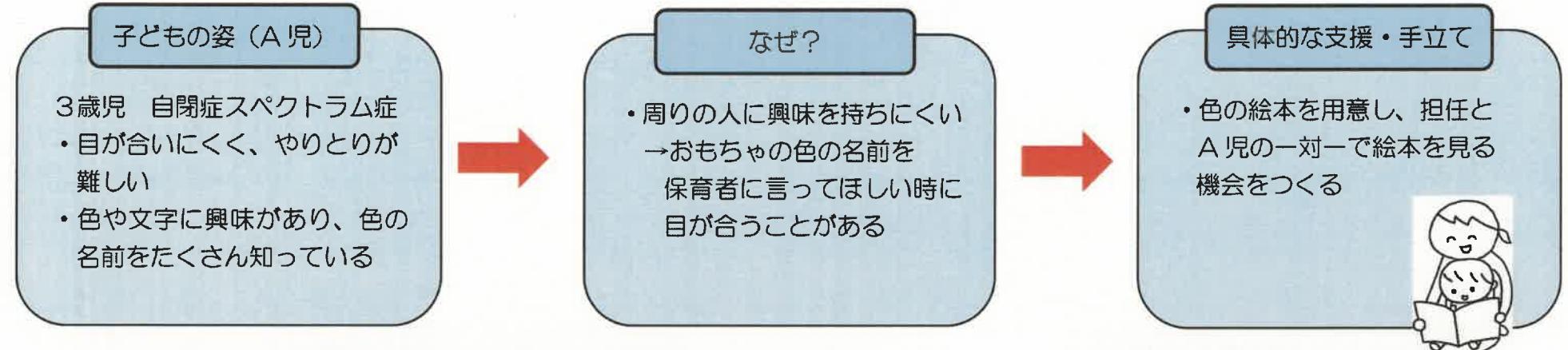
- ・表情が豊かになった
- ・指さしで思いを伝えようとすることが増える
- ・できたこと、うれしいことを表情やしぐさで伝えに来ている
- ・1対1で話をすると声を出して答えることがある
- ・保護者と保育所で話をすることが出てきた
- ・友達と遊んでいる中でたまに声が出ている

気付き

- ・友達や保育者に対して安心していることで、表情が豊かになってくる
- ・伝えたい、話したい気持ちがあるが思うように伝えられない本人の思いに寄り添うことが大切
- ・喋ってほしいという保育者の思いが子どものプレッシャーになることもあるため、雰囲気にも気を付ける。

実践研究全体を通した考察

- ・自分とは違う考え方や子どもの見方を知ることができた。困っている子どもの姿をいかに的確に時間内に子どもの姿を知らない相手に伝えるかということの難しさを感じた
- ・一人の子どもをじっくり見て『なぜ?』と考え、思いついたことをひたすら文字に出し検証することが簡単そうで難しくいろいろな考えに触れるいい機会なることが分かった



その後の様子・気付いたこと

『まるてんいろいろ』の絵本を用意した。はじめはページごとの色の名前を保育者に言ってもらうことを楽しんでいて、ページをめくるたびに目が合った。

繰り返し読んでいると、同じ色の丸を保育者に指さしてほしくて、保育者の腕をつかんで動かしていて、「赤色一緒だね」「指さしてほしいの？」など言葉を添えながら読むようにした。

小さい丸の時、大きい丸の時で、声に抑揚をつけて読むと喜んでいて、小さい丸と大きい丸のページを来たり戻ったりして繰り返し楽しんでいる。

実践研究全体を通した考察

目が合いにくいが、“このときは目が合いやすい”（この例では、色の名前を言ってほしいとき）と関わっている中で気付いた。また、絵本が色のはっきりとした絵であったり、A児の興味に沿うものであったりしたため、保育者とのやりとりを楽しめていたように感じた。

今後は、絵本を通して保育者や友達とやりとりが楽しめたり、A児の動きや仕草を「～してほしいの？」など言葉に置き換えていったりすることで、やりとりが深まっていけばと思う。

『まるてんいろいろ』 中辻悦子著 福音館書店



<子どもの姿>

A児 4歳児(療育に週3回通う)

- ・あそびからの切り替えが難しい。
- ・友達とトラブルになると衝動的に手が出ることがある。(保育者に対して)
- ・クラスの友達、保育所が大好き。
- ・絵やブロックの構成や発想がおもしろく、友達が真似をしたくなる魅力がある。

<クラスの状況>

24名クラス 担任2名(○、■)

欠席が少なく、全員出席の日が多い。



<気になる状況>

- ・担任○が対応するときと、■が対応するときで A児の見せる姿が異なる。
(具体的には…)
- ・A児がトラブルなどで切り替えが難しい時に○が対応すると納得できことが多いが■だと難しい。
- ・外あそびから室内へ入るときの切り替えが難しく、声掛けだけで室内へ入ってくことができない。まだ遊びたい気持ちがあるときに■が対応しに行くが、A児の気持ちとの折り合いがつかず、最終的に■が A児を抱きかかえて室内に入る。

○



なぜ…？(■の対応の理由)

- ・A児が(クールダウンを必要とする)
怒りがあったときの対応がわからない。
- ・クラス全員で保育をすすめないと
いけないという思いが強い。

<具体的な手立て>

①登所時のルーティーン(門から母が見えなくなるまで見送る)のときに■がそばに寄り添い、A児との会話を楽しむようする。

②午後からの療育から帰ってきたときに「外であそびたかった」という思いがあるので A児と■で、帰ってきてから1対1で外やプレイルームで15分～20分程あそぶ。療育に行く前に口頭で A児と担任どちらかが外あそびの約束をしたり、絵カードを描いたりし、渡す。

<その後の姿>

①朝の受け入れのときに■が対応することで、何気ない会話を通して A児の機嫌や様子が分かるようになり、それに応じた対応も臨機応変にできた。A児が■に対しても甘えたり、頼る姿が見られるようになった。

②療育から帰ってくるとおやつの時間なので行く前に約束することにより、A児もあそぶことを楽しみに帰ってくることができた。

①、②を通して…<気付き>

A児の気持ちが乱れている場面より A児が楽しんでいるときや「これをしてみたい」と思っているときに一緒に過ごすことで「この■先生とあそぶの楽しい」、「困ったらこの先生に言ってみよう」と感じられるようになったように思う。

<考察>

事例を発表したときに A児の困り感ではなく■保育者の困り感だと気付かせてもらった。

■保育者のクラスへの思いなども考え、どのような手立て、方法が A児、■保育者、クラスにとっていい方法か考えられる良い機会になった。

トラブルの対応からではなく、楽しい事を共有することで信頼関係ができるということに気付かされた。

夏の姿**子どもの姿**

- これまでに何か嫌なことがあり、保育者や友達の一言がきっかけで大きく気持ちがくずれ、なかなか次の活動に移れない。

なぜ？

- 完璧主義などがある？
(できないといけないと思っている)
- 先が見えすぎていて不安

具体的援助・手立て

- 活動の切れ目に前もって声をかけ、順番を選んだり、どうするかを選択してもらう。

その後の様子・気付いたこと

- 自分で選択したことで最後までやり遂げたり、くずれることなく参加できることが増えた。
- どうするかを選択してもらう機会を作つていて、普段からも自分の気持ちを伝えてくれるようになった。

・責任感がある
・友達のことをよく見ている

・LaQが好き

4歳児 A児

子ども24人、担任2人

運動会の練習での姿**子どもの姿**

- 運動会の練習時に、疲れもわかっていてやる気はあるが、疲れてふざけてしまったり、乗り切れないことがある。
- 3人組の技などは参加しようとする姿がある。

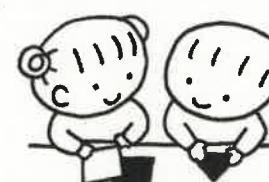
なぜ？

- 失敗したくない？
- 一人ですることの不安？

**実践研究全体を通した考察**

グループで1つの様子に対して皆で「なぜ？」を話し合うことでいろいろな視点からの意見が出てきて、とても勉強になった。「なぜ？」を深く考えていくことで、援助・手立ての方法も見つけやすくなった。

他の方の様々な子どもの様子も聞くことができ、同じ様な姿があった時には、日々の保育に生かしていくことができた。

**具体的援助・手立て**

- 得意なこと（LaQ）を担任や友達に教えて遊びを広げ、自信につなげていく。
- 発表会では「おべなべごめけ」やセリフなどもペアで取り組む活動を取り入れる。

その後の様子・気付いたこと

- 「いいとこみつけ」で友達に褒めてもらったことで、嬉しそうに友達に教える姿がある。
- 発表会本番では、ペアの活動の無い役を選んでいたが、自分で選んだ後は、最後までやり遂げていた。セリフも2人で言えたことで自信につながったと思う。

A児の気になる姿への実践研究まとめ



4歳児 A児

29名 担任2名

走ること、大好き、虫が大好き！

好きなこと、走ること、虫、レゴブロックの人形でごっこ遊びをすること



3・具体的な援助と手立て

- ・室内から出ていくときに走って室外に出ていたので、どこに行きたいかを伝えられるように、お出かけボードを置き、カードで伝える。
 - ・といれにいきます→ただいま
 - ・じむしょにいきます→ただいま
 - ・てらすにいきます→ただいま
- ・タイムタイマーで時間を決めて見通しをもちやすいようにする。
- ・1番になりたい気持ちがあるので、クラスやグループで遊ぶ順番を一番最初にする。

1. 子どもの姿

外から部屋に帰る時にテラスをずっと走っていることが多い。そのまま滑り台に行く姿がある。トイレに行った後もテラスをくるくる走り回っている。



2. なぜ…？

- ・イスに座って待つことが苦手？
- ・好きな場所を探している？
- ・友達を誘ってテラスを走ることや滑り台を滑ることが楽しいのかな？
- ・何したらいいか見通しがちにくく？
- ・呼びにいくと、嬉しそうにしていることがあるので関わりを求めている？



4. その後の様子・気付いたこと

- ・外から部屋に帰った後の活動が朝の会であり、話を聞く時間が分かるようにタイムタイマーで知らせた。「3分きけたね」と自信を持つようになってきた。
- ・遊び込めていない姿の時にとびだしていることが多いことに気付いた。
- ・外から帰ってこない時は、友達と滑り台で遊びたいと理由があったが、遊びに満足する中で、部屋から出ずにレゴやままごと等をして過ごす時間が増えている。
- ・これまで、友達との関わりの中で手が出る姿があり、注意される場面があった。A児の気持ちに寄り添い受け止めていくようにする中、外から部屋に入る時に滑り台にいることが減ってきてている。



5. 全体の考察

子どもの姿から、「なぜ？」を考えしていくことを知った。子どもの「なぜ？」を考えていくことで、援助や手立てが見えてきた。また、グループのメンバーから、意見やアドバイスをもらうことで、自分では気付かなかつた方法や意見を知ることが出来た。

子どもの姿を伝えて話あっていく中で、考えが整理され子どもが何で困っているのかが見えてきた。

一人ひとりの子どもが、環境を変えていく中で、いきいきと過ごすことができることが分かった。



子どもの姿(3歳児、男児)

○着替えるのに時間がかかる

・寝寝前の着替えになると座り込み、カゴの中から着替えを乱雑に出したり、靴下を投げたりし、時間がかかり保育者が着替えを手伝うことが多い。

なぜ?

①着替えたくない。

- ・着替える必要性が分からない。
- ・自分の決めた順番通りにしたい特性がある為、順番が納得できない。
- ・着替えるのがめんどくさい。

②環境(ロッカーの位置、導線)が子どもに合っていない。

- ・着替える場所が狭く、周りの友だちのことが気になってしまふ。
- ・トイレ、ロッカー、午睡場所が離れており、移動する間にいろんな刺激(友達の様子、保育者の動きなど)がある。

具体的な援助・手立て

①について

- ルーティンの順番を変える。
- 汚れた服だけ着替える。

②について

- ロッカーの場所の変更。
- かごを着替えやすい場所に持っていく。

その後の様子

① 着替えたくない。

→手順表を変える事で、先の見通し(楽しいこと)を持ち、着替えを自分ですることが増えた。

使用している手順表を見ながら、「この着替えを先にしてみる?」と聞くと、「着替えは手洗いの後にする。」と話す。また、手順表を見ながら一つひとつ確認するように声に出していた。そのことから、手順表通りに行いたい、手順を覚えられない(視覚に頼っている)ということに気付いた。先の見通しが持てず、楽しいことがない様に思ってしまう為、着替えに時間がかかる、着替えている時に保育者や友達と関わろうとしているのかも、と考えた。

その為、今まででは寝寝までの手順表だったが、午睡して起きたら好きな遊びの時間ということが視覚でも分かるようにする。

そうすることで、「起きたら電車で遊ぶ。」など、イラストを指さすようになり自分で着替えようとする姿が増えてきて、寝起きもよくなつた。



②環境(ロッカーの位置、導線)が子どもに合っていない。

→着替えのスペースを広く取り、ゆっくりと自分のペースで着替えることが出来るようになった。

周りが気になってしまい、時間がかかっていた為、仕切りで区切れるようロッカーを奥の位置にしていた。しかし、「これ(仕切り)いらない。」と仕切りを嫌がることが増えて、隣の友達との距離が近く、周りが気になる環境になってしまった。

その為、着替えの場所を広く取り、又、真ん中の少し周りの見える場所にロッカーを変える。周りが気になり時間がかかるものの、友達が着替えている様子を見て、自分のやることにも気付く様になり、保育者の声掛けが少なくなった。

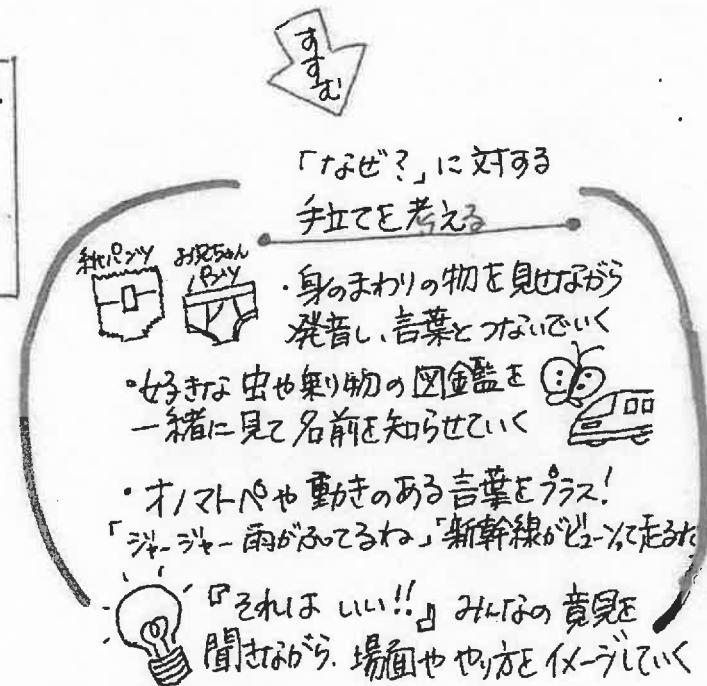
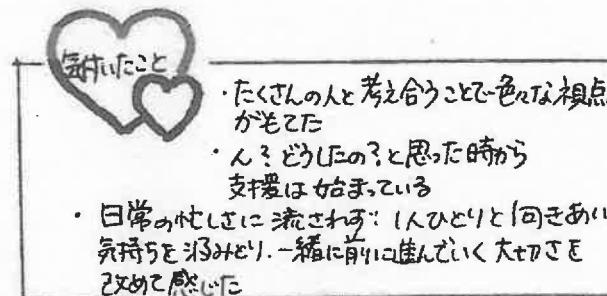
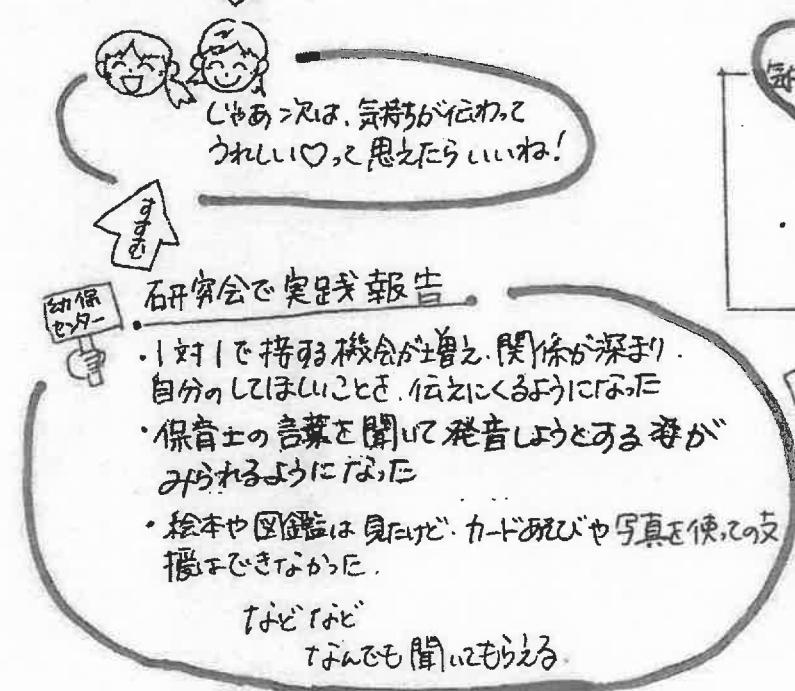
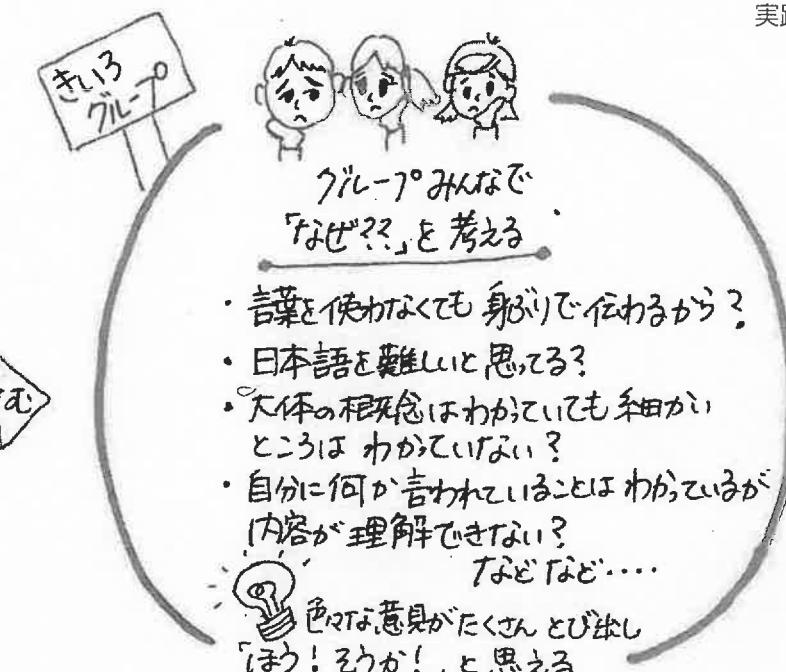
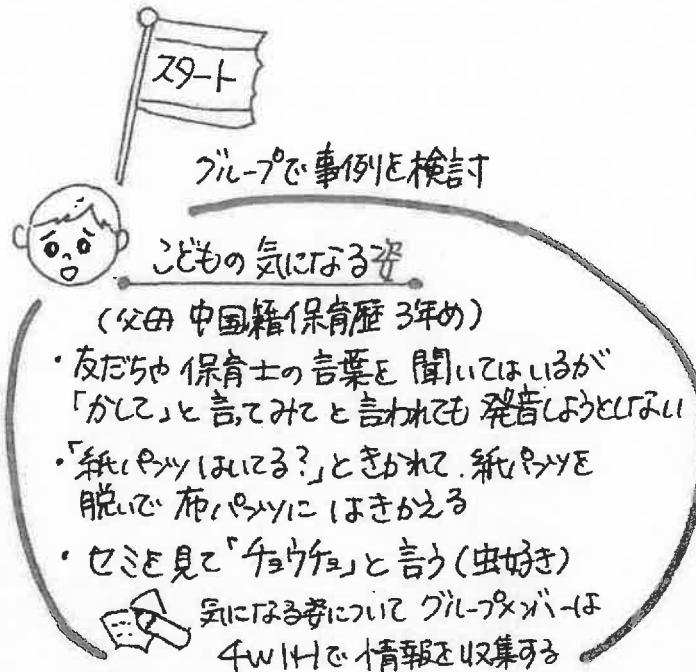
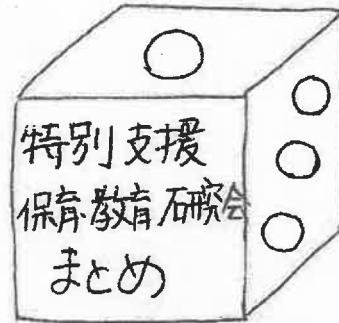


気付き

・日頃自分のことによく話し、手順表も「これいらない。」と言い使おうとしないことが多く、また、周りが気にならないようにと奥のロッカーにしていた。しかし、手順表を頼っていた事や友達の様子を見て自分の行動を確認していたことに気付いた。環境を少し変えるだけで、子ども自身が見通しを持ち進んで行動出来る様子を見て、「なぜ?」と保育士間で深く考えていくことの重要性に気付くことが出来た。

研究の実践全体を通した考察

・その子に合わせた保育をする為には、子どもの様子を観察し、それを基に客観的ないろんな方向からの視点で援助や手立てを考えることが必要だと改めて思った。子ども一人ひとり違うことを再確認でき、保育の中で子ども一人ひとりに対し「なぜ?」の視点を持ち、様々な視点からよりよく成長出来る環境を整えていくことが大切だと勉強させてもらった。



1. 子どもの姿

- ・3歳児 男児
- ・今年度新入児
- ・昨年度までは、小規模保育に通っていた
- ・15人クラス（2人担任+フリー1名の体制）
- ・母親が迎えに来ると、わがままを言って困らせる
- ・何かと理由をつけて、降所に20~30分かかる
(片付けたくない、階段の手すりを持ちたくない、上靴を脱ぎたくない、所詮で遊びたい、など)
- ・母親は「困っていない」と言う



2. なぜ？

- ・気持ちのコントロールができない（①）
- ・母なら要望をすべて受け入れてくれるから（②）
- ・まだ片付けたくない、もっと遊びたい
- ・家での楽しみにしていることがないから など



① 気持ちのコントロール(切り替え)ができない

3. 具体的援助・手立て

- クラスでルールを決める
(作品を置いておけるのは1個まで、金曜日は作品を残して帰らない)



- 片付けシールをする
(クラスでの取り組み、片付けをしたらシールを貼るスタンプカードのようなもの)

4. その後の様子・気付いたこと

- ・日中は「片付けたくない」と言っている場合でも、シールを貼ることをモチベーションに気持ちを切り替え、片付けをする姿が出てきている
- ・保育士にルールを確認したり、「今日は何曜日？」「明日はお休み？」と気にしたりする様子がある
- ・友達に対して、クラスルールを伝える様子もある

3. 具体的援助・手立て

- 母親とコミュニケーションをとる
 - ・その日の様子を、母親に伝える
 - ・クラスでのルールを母親に伝え、保育士と保護者で対応の方法を共有する



4. その後の様子・気付いたこと

- ・こちらが話しかけると、母親も家庭での様子を話してくれる
- ・母親が本児のことについて「困っているんです」と言うことがあった
- ・母から話してくれる場合の話題は、子育てに関する質問が多い
 - 母親は、子育てへの不安感が強いのでは？
 - ⇒担任は、まずは「そうですね、難しいですね」と受け止め、共感する
 - ⇒子育てについてのアドバイスなどは、主任やベテランの保育士にも協力してもらい対応する
- ・母親も本児に対して、一貫した態度で接することが増えた

5. 実践研究全体を通しての考察

子どもの姿からグループで話し合い「なぜ」や手立てを考えることで、気付かなかった視点で意見がもらえ、貴重な機会だった。子どもの良いところを大切にしながら子どもたちと向き合っていきたいと思う。困りごとのある子どもへの手立てでは、クラス全体への支援にもなると感じた。今回の児童は、今年度入所ということもあり、関係を築くことが優先だと考えたが、改めて保護者対応は難しいと感じた。母親と一緒に、本児への対応を試行錯誤している。主任やベテランの保育士にも意見をもらいながら対応を考えていきたい。



《子どもの姿》

- ・2歳児 A児
- ・周りに人がいると落ち着かない。
- ・自分のパーソナルスペースに友達がいると、押す、叩くなどしてしまう。



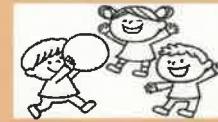
《なぜ?》

- ・パーソナルスペースが広い?
- ・行動のコントロールができない?
- ・友達と関わりたい?
- ・友達の反応がおもしろい?
- ・集団で遊ぶことが苦手?



《具体的な支援・手立て》

- ・保育者と一緒にふれあいあそびをする。
(ひっつきもっつき、一本橋ごちょこちょ、
きゅうりができた など)
- ・個別スペースで好きなおもちゃを使って遊ぶ。



《その後の様子・気付いたこと》

(その後の様子)

- ・保育者と一緒にふれあいあそびすることにより、保育者と一緒に楽しむことが増え、外あそびも保育者や友達と一緒にかけっこを楽しむことも増えてきた。まだ、友達を押す、叩くなどすることがあるが、友達が本児と一緒に遊んで楽しいと思えること（かけっこ、ボール投げ、電車のおもちゃなど）が増えた。そのことにより、本児が気持ち良く友達と過ごすことが出来るようになってきている。

- ・個別スペースで好きなおもちゃを使って遊ぶことにより、パズルなど一人で集中して遊べることが増えてきた。

(気付いたこと)

- ・観察記録をしていると、一緒に遊びたいとき、貸してほしいときにも友達を叩くことがあり、「入れて」「一緒に遊ぼう」「かして」と言葉で言えるように伝えている。
- ・生活習慣が不規則で、夜寝ることが遅いことや本児の体調によって気持ちが不安定になり、友達を叩くことが増えていた。家庭と連携をとり、生活習慣を改善していく。
- ・本児の好きなこと（かけっこ、虫探しなど）、得意なこと（速く走ることが出来る、保育者や友達とたくさん会話が出来るなど）、良いところ（泣いている友達に優しく声を掛ける、人懐っこいなど）を見つけ、伸ばしていくことで、自信を持ち、心が安定するようにしていきたい。

《研究の実践全体を通した考察》

一年間この研究会に参加させていただき、自分のクラスの気になる子どもの様子を伝え、他の園の気になる子どもの様子を聞き、意見を出し合うことで、様々な手立てや考え方を知ることができました。手立てをすることで、新たな発見があり、より良い手立てを考える機会となりました。様々な手立ての手法や保護者への関わりの方法なども学べ、実践していくこうと思いました。この研究会を通じて、他にも、色々な手立てを考え、今後も更に学びたいと思うことが出来ました。

また、小学校を見据えた支援をしていきたいと思いました。

<子どもの姿>

2歳児 A児

B児 療育手帳を所持

・給食時、白米しか口にしない。他の物に手をつけず、1プレート提供のため、一緒にお皿にのっていることも嫌がることがある。



<なぜ?>

- ・食への関心がうすい。
- ・他の食材の食感、味、匂いなどが苦手であったり、敏感である。

<具体的な援助・手立て>

○食材に触れる

- 例・給食室にお願いをして、トウモロコシの皮むきをする。
 - ・焼き芋を行い、その場でみんなで食べる。
 - ・他学年が、トマト、ピーマン、大根、人参、里芋を育てているのを園庭あそびの時に一緒に観察に誘う。
 - ・収穫した時に野菜を見せて貰う。

- 分けられる食材は分けて提供をする。
- 友達が食べている様子が見れるようにする。



<考察>

園では、主に幼児に対して食育を取り入れているが、今回このように乳児でも取り入れたことで子どもたちが興味を持つことが分かった。また、当事者の二人だけではなく他児も給食時に「これ、さっきのお芋?」「これは、何?」などと興味を示し、「ちょっと食べてみる」などという姿が見られた。このことで当事者ではなくクラス全体が『食べてみよう』という雰囲気ができた。

また、この研修を通して他園の事例を聞かせて頂いたりすることで、クラスの子どもとリンクさせたり担任間で話し合う時間を作り少しでも対応をすることができ、とても勉強になった。

<その後の様子>

A児

- ・トウモロコシをきっかけに食材に興味を持ち始め「これは何?」と尋ねて来るようになる。「一つは食べるね」と言つて口にするようになる。
- ・混ぜご飯など、最初は保育者が全て取り除いて提供をしていたが、今では自分でするようになってきた。また、友達の様子を見て口にすることもでてきた。



<その後の様子>

B児

- ・配膳時に他児から配るようにした。そのことで他児の食べる様子を短時間でも観察することができるようになった。様子を伺い、スプーンですくったり最近では口にするようになった。
- ・気に入ったおかずは「おかわり」と言って食べる姿が見られる。





3歳児 Aくん

Aくんの姿

- ・電車、新幹線が好き
- ・鬼になりたい
- ・三輪車大好き
- ・記憶力が良い
- ・話すのが上手
- ・行動がゆっくり（慎重）

気になる姿

「次の行動に移るときに最後になってしまう」

- 例)・所庭から部屋に入るときや、トイレに行くときなどの場面の切り替えのとき
・朝の準備、食事、着替えなど一つ一つの行動がゆっくりで最後まで残っている

なぜ？

- ★待ちたくない、手持ち無沙汰になってしまふ時間が嫌で、みんなが終わるのを待っている
◇間違えたくない、確認をしたい

具体的な援助・手立て

★待っている子どもたちと手遊び、ゲームをする

★先生役、お手伝い係をお願いする

◇朝の準備に必要なものが視覚で分かるようカードで示す

その後の様子

→・Aくん自身手遊び、歌は好きであるが、姿はあまり変わらなかった。他の手遊びや歌にも取り組んでいき、好きなものを見つけていく。

・イス取りゲームを行う。まだ楽しい遊びになっていない、すぐに遊びに入るタイプではないため、気になってはいるがやりたいから早くしようとする姿はない。

→全体に向けて発信するが、準備が間に合わないため、なかなかできない。

→わかりやすいイラストのカードを作る。所庭から入るときにカードを渡し、準備ができたら保育士の所へ持ってくるように伝えると、少しやる気が出ていたような気がする。忘れっぽいところがあるため、カードを見て行うと少し早くなったように感じる。

<実践研究全体を通した考察>

研究保育が自分の所と聞いた時は緊張や不安でいっぱいだったが、自分が保育している時には気付かない子どもの姿を見つけてもらえて、そこから気になる姿のなぜ？や手立てを深く考え、意見を頂ける機会になりとても良かったです。自分の事例だけでなく、同じグループの先生の事例に対して、「なぜ？」、「援助や手立て」を考えてみたが、複数考えるのが難しいと感じました。グループで意見を出し合うことによって、1人では出なかった意見が出てきて、学びになったので、この研究会が終わったから終わり、ではなく、Aくんの他の援助・手立てにも取り組んでみたり、他の子の気になる姿でも事例検討をしてみたりと今後にもつなげていきたいと思います。

5歳児 男の子



言語発達遅滞 B2判定

作ること大好き！ゲーム大好き！
アニメなどのキャラクターが大好きな男の子。

いろんな活動に意欲的に参加し、周りの人にも積極的に関わることができる。自分の思いや考えを、クラスでの話し合いの場面等で発表することもできているが、相手が話している間に喋りだす姿や、様々な活動の中で大きな声で話そうとする姿がある。

なぜ？



声の大きさが気になるな…

自分の声の大きさを分かっていない

声の大きさのコントロールが難しい

考えた手立て

★1 声の大きさの段階を見直そう

★2 声を使った活動を取り入れてみよう

★1 声の大きさをキャラクターを使って

3段階で伝える

これまで声の大きさは
1=小さい声～5=大きい声のように
数字を使い5段階に分けて伝えてきた。
もっとわかりやすく声の大きさが意識できるように、
5段階 → 3段階 数字 → キャラクター
に変更して声の大きさを伝える実践を行った。



「今、ジャイアンの声の大きさになってたよ～」などと、本児の身近にあるアニメのキャラクターを使って伝えることで、声の大きさのイメージをもってもらいやすくなつた。また、発表会の取り組みでも「しづかちゃんみたいな声できれいにうたおうね」「セリフをいうときはジャイアンぐらいね」などと、クラス全体でも声の大きさのイメージを共有することができた。

実践研究全体を通した考察

今回の研究会を通して、保育所で考えている個別支援計画と違った視点から、支援を考えて実践できただけが一番の学びとなった。子どもの困り感を考えれば考えるほど、何を取り上げたらよいのか悩むことが多かったが、この研究会で複数の保育士と子どもの姿を共有することで、自分では気付かなかった視点が見え、いろんな支援のアイデアを知ることができたので、職員間で子どもの姿を共有することの大切さに気付けた。子どもの気になる姿から、“なぜその姿が見られるのか”という部分を丁寧に考え、また、一人で考えるだけでなく、より多くの職員と一緒に子どもの姿を共有し、支援していくことを意識しながら、今後の保育でも十分に生かしていきたい。

★2 声の大きさを意識して

歌をうたってみる



歌をうたう活動で、同じ1曲の歌を“しづかちゃんの声バージョン”“ありの声バージョン”などと声の大きさを使い分けてうたう活動を取り入れた。

楽しみながら声の大きさを使い分けることができていた。より声の大きさの段階を具体的にイメージできるきっかけになった。

2つの支援を通して、声の大きさの段階を本児と一緒に改めて確認できたことはよかった。

まだまだ声の大きさを自分でコントロールすることは難しい姿が見られるが、「〇〇の声で話そうね」と声をかけるとすぐに意識することができるため、引き続き、声掛けや様々な取り組みを通して支援を行っていく。

＜子どもの姿＞

- ・5歳児 A児
- ・偏食で、自分の好きな食材のみ食べている。
- ・苦手な食材を見ると、席を離れて遊んでいる。
- ・水分補給はジュースと汁物(味噌汁やスープ)で摂取している。



＜なぜ？＞

- ・こだわりが強い。
- ・食への興味・関心が薄い。
- ・見た目で判断している。(切り方や調理法が変わると同じ食材と気付かない。)



＜研究の実践全体を通した考察＞

- ・給食時、同じ保育者が付くことで、こだわり等を知りその時々の対応を考えられた。それと同時に、本児との信頼関係を築くことで苦手な食材も食べられるようになった。
- ・食への興味や関心が少しずつ増えてきていることもあり、保育者の促しで苦手な食材も自分で完食している。今後も引き続き様々な援助方法を考える必要がある。
- ・「なぜ？」を常に考え、具体的な援助や手立てを考えていくことで、個々にあった援助方法を探し実践していく大切さを感じた。

＜具体的な援助・手立て＞

- ・食べ物や食材の名前が入っている音楽やふれあいあそび、絵本等を通して、食材にも名前があることを知らせる。
- ・食材の見た目が変わっても、同じ物と気付けるように言葉と視覚で伝える。
- ・どうもろこし一粒程度の量から食材の味に慣れるようにする。
- ・口に入れた時はハイタッチで喜びを共有し、褒めることで次の意欲へつなげられるようにする。



＜その後の様子と気付いたこと＞

- ・興味のある遊びを通して野菜など食材にも名前があることを伝えることで、食事に興味を持ち始めた。給食のワゴンが来ると、給食をチェックする姿が出てきた。好きなメニューの日は自分で席に座るようになった。
- ・視覚支援で野菜のイラストなどを見せながら食べる事で、食材の名前を言いながら食べる姿が増えてきている。給食を見ようとしている時も、好きな食材を見せながら名前を言うと見て食べている。味と見た目が一致することで食べようとする気持ちにつながった。自分でフォークを使い食べる姿が増え、興味のある食材を口にするようになってきている。
- ・食材の名前と見たものが一致するようになり、食材などの名前も出るようになってきている。
- ・味に慣れたり保育者と喜びを共有したりすることで、完食するようになった。また、食事を通し感情を表現する姿にもつながった。



○クラス編成○

4歳児18名 担任1名

○子どもの姿○

- ・入所3年目。コロナ渦は家庭保育が多かった為、昨年まで登所日が少なかった。
- ・外国籍。保育所では日本語で会話しているが、家庭では母国語で会話している。

○好きなこと○
感触遊び、色塗り、ポケモン、保育士のお手伝い



～研究の実践全体を通した考察～

子どもの気になる姿に対して、担任の見立てのみで支援や援助を考え、息詰まる事が多々あったが、今回グループワークを何度も行う事でいろいろな視点で『なぜ？』や『援助・支援』について考える事が出来た。この研究会だけで終わりにするのではなく、保育所でもいろいろな職員と、このワークを使って子どもについて考えることを続けていきたいと感じた。

気になる姿

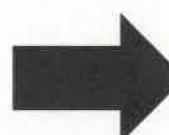
急に泣き出す！！

なぜ？① 言葉での表現が難しい

【具体的な援助・支援方法】
保育者に助けを求める時にHELPカードを使えるように子どもに持たせる。
ご機嫌メーターでその日、その時の気分を伝える。

なぜ？②居心地が悪い。
家庭保育が長引いたこともあり、友達の成長との差にギャップを感じている。

【具体的な援助・支援】
休憩スペースを作り、しんどくなったら入れるようにする。



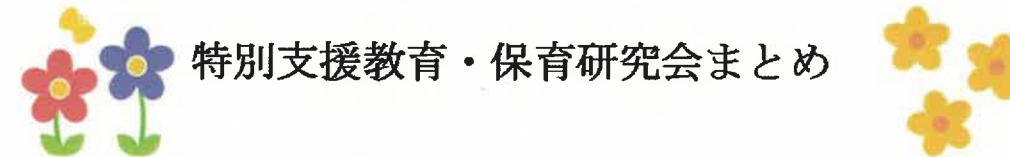
～その後の様子～
休憩スペースに一人で入るだけでは、気持ちを落ち着かせることは難しかった。※しんどくなった時は保育者のギュ！が1番効果的だという事が発見できた。

～その後の様子～

・HELPカードに加えてハグカードも作成し、首からかけられるようにした。カードが安心材料になり、落ち着いて過ごせるようになった。カードの使用を経て、現在は言葉で保育者に気持ちを伝えられるようになつた。
・ご機嫌メーターを使う事で自らその時の気分を伝えられるようになった。

今後に向けて…

クールダウンのレパートリーを増やしていく。
集団活動中にしんどくなった時の伝え方を探していく。



特別支援教育・保育研究会まとめ

① 子どもの姿

- ・A児 5歳6か月 療育に並行通所。

② なぜ?と支援とその後

☆自分の思いを他者へひたすら話し続ける

	① 物的環境	② 全体への支援	③ 対象児への個別支援
なぜ① 最近話せるようになつたこともあり、喋りたい	○表情カード	○出来る部分を伸ばしながら、好きなことから遊びを広げていく。	○担任とA児の1対1での関わり。相思相愛の子が出来るといいね～。 ○コミック会話で「こう思っていたんだよ。」ということを視覚的に伝える。 ○交互にしていく遊び(黒ひげ・お絵かき・やまびこ)
●実際にみた支援		○1対1での会話や絵描き等は、意識。 ○「大好き～」や、食事の「残す」の発信にも丁寧に対応。→言えたね～と受け止め続ける。このまま積み重ねていく。	
✿その後✿		○身体を動かす遊びは大好き。“デキタ”“友達と一緒にしたい！”の思いが膨らみ、友達にスピードを合わせるということも遊びの中でできるように。 →友達にスピード合わせて、ちび縄持ちバランクで進むことも始める。 ○大好きなバランクで“デキタ！”もたっぷり楽しんでいくことで、構えることなく、自分が考えた技「見てみて～前技やねん」等、友達や大人に発信するように。	○交代交代の遊び、大人側が意識して支援として入れることは出来なかったが食後に毎回同じ子と交代交代でオニをして、かくれんぼを楽しむ姿は出てきた。→楽しい遊び(サッカーとかくれんぼの延長)から交代交代と言ふことも理解し始めている? ○サッカーしている際に「〇〇くん行くで」と蹴る前の構えを言葉で伝える姿も出てきて、相手の表情を理解するまでは難しいかもしれないが、やりとりする機会話す機会は増えてきた。
なぜ② 他者の表情読み取ることが苦手	○鏡や、枠を使い、表情知らせるゲーム等。 ○写真用いてみても。	○大好きを言い合っていくゲームを楽しむ。	○好き～！を伝えていく。 ○デキタの経験。
●実際にみた支援		○相思相愛、つもうが合う子が増えてきて、かくれんぼやサッカーを楽しむ姿が出てきたので、対大人だけでなく友だちと1対1の関わりも保障する。見守ったり、仲立ちすることで“楽しかった”を積み重ねてきた。	
✿その後✿		○ゲームはしていないが、5歳児を真似て、担任以外の大人や友達にも自ら「大好き～」と言いに行き、「先生も大好きだよ」と返してもらい、嬉しそうにする姿も。	○特に給食時、苦手なお野菜を「先生と一緒に食べたい」と自ら言い、食べれた！を毎回積み重ねていく事で、自ら毎回発信してくれるようになった。 ○「今日は自分で食べれた」と見せてくれる日もある。 →更に大好きなお家ごっこ「入っていいで」と友達に言ってもらい「先生、入っていいだって。早く食べるわ」と苦手な食材も遊びたい気持ちから“食べてみよう”的気持ちに変わった。また「これ残す」の発信も言えるようになってきた。
✿気付いたこと✿		○友達にも大人にも根本的には認めてもらいたい。 ○生活についても、1対1で丁寧に話しながら定着させていくと、毎日自らするようになっていく。 ○分からぬ中、指吸いや寝転がる等で“わからない”は発信してくれている。 ○YouTubeの影響を大きく受けている可能性も。話す事や、絵から。	

実践研究全体を通した考察

- グループ内や、木曾先生の意見からたくさんのはなぜ?が出て、また手立てもたくさんの意見がもらえてよかったです。→複数の目でいろいろな視点から手立てや考察することで、よりA児に合う手立てを考えることができてよかったです。
- 他グループの配慮・手立てを聞くことで、クラスの他の支援を必要とする子どもに試せるような配慮も学べることができて、いい機会になった。園内だけでは思いつかないことも。

【クラスと対象児の様子】

- ・男の子、5歳児
- ・19人クラス 担任2人

#好きな遊び

- ・ブロック遊び
- ・制作
- ・水遊び
- ・運動遊び

#性格、得意なこと

- ・人懐っこく愛嬌がある
- ・想像力、構成力があり立体的なものを作るのが得意
- ・思い通りにいかないと怒り、泣いて訴える
- ・友達や保育者が好き
- ・気持ちが落ちているときは優しく思いやりがあり相手の気持ちに寄り添う

【気になる子どもの姿part1】

- ・友達との物理的な距離が近くトラブルになることが多い。



なぜ？

- ・一緒に遊びたい。
- ・自分の気持ちを分かってほしい。



具体的な援助・手立て

- ・友達とルールを共有する。
- ・自分の気持ちを伝え、相手の気持ちを聞きお互いの気持ちを知る。



その後の様子・気付いたこと

- ・好きな遊びを通して、クラスのルールを決めた。
- ・ルールを共有して落ちている様子。
- ・保育者が仲立ちし、お互いの思い、要求を代弁することで気持ちが落ちくと「はい、あげる」と相手に寄り添い譲ろうとする姿が見られた。

〈ラキューのお約束〉

- ・友達と一緒に使う
- ・金曜日にすべて片づける
- ・遊び終えるときは机の周りをチェック！

【気になる子どもの姿part2】

- ・人のことが好きでスキンシップを取ることを好む。
- 好きな相手には、甘えから距離が近く過度のスキンシップを取る姿がある。



なぜ？

- ・好きだからくっつきたい。
- ・距離感がわからない、止められない。（衝動性）



具体的な援助・手立て

- ・友達に具体的な言葉で伝えてもらう。
- ・遊びの中で保育者や友達と楽しく触れ合う機会を作る。
- ・本児に分かりやすい方法で相手との距離感を伝える。



その後の様子・気付いたこと

- ・感情が興奮しているときは落ちくまでに時間がかかる姿があるが、少しずつ相手がされて嫌なことを理解している。
- ・保育者や友達との触れ合い遊びを通して、甘えを表現出来ていたり、相手の思いを受け入れている姿があった。
- ・気持ちが落ちている時は手を伸ばし距離を測る姿があった。

#実践研究全体を通した考察#

- ・子どもに対しての考察、援助を考える中で自分1人では出てこないこともグループの先生方と話し合うことでいろいろな考え、意見をお聞きすることができ、改めて意見を交換することの大切さに気付き、また今後の保育においての新しい学びにつなげることができました。貴重なお時間をありがとうございました。



気になる姿1 物を投げる

[なぜ?]

- ①思い通りにならなくてイライラする
- ②気持ちの表現の仕方がわからない

“①②の手立て以外にもこんな手立ての提案がありました!!”
 • 投げてもいいものを用意する。
 • 絵を描きながら一緒に気持ちを整理する。

[具体的な手立て]

- ① 保育者とマンツーマンで別室にて過ごす
- ② 普段遊んでいる横で、子どもの気持ちや行動を言葉に置き換える（パラレルトーク）

“こんな姿から考えました”
 • 外に出て、草を抜いたり砂に絵を描いたり…となかなか体を動かさない。
 • 普段の動きから、低緊張気味かも？

[その後の様子]

- ① 落ち着いて過ごしている。避難訓練の際、泣いている友達を引っ掻きに行く
- ② おこなってみたが反応がなく、聞いている様子もない

②から、三項関係が出来てないかも…
 →保育者と交互に積み木やブロックを積む等、三項関係を意識しやすい遊びを取り入れました！

3歳児 A児

好きなこと

- ♡ひらがな、数字、アンパンマン
- ♡歌う事、絵を描く事、こちょこちょ

気になる姿2

午睡時に
なかなか寝れない

[なぜ?]

- ① 体力がある
- ② 体を脱力させることが苦手
- ③ 環境が落ち着かない

[具体的な手立て]

- ① 日中、体を使って遊ぶ 追いかけて走る etc…
- ② タオルで包む、布団の下にマット等を挟む
- ③ 午睡場所をパーテーションで仕切る

[研究会全体を通しての考察]

この研究会に参加するまでは、子どもの気になる行動への対応は、“起きたときにどうするか” “起きないためにはどうしたらいいか”と、支援カードや環境を見直すなど様々な方法を試しながら行なっていました。この研究会に参加し「感覚、記憶、コミュニケーション能力、興味・理解、集中力・思考のくせ」の5つの面から子どもの背景を考察することで、その子にあった適切な対応ができる事を学ぶことができました。実際おこなってみた事例検討では、その子に合っていてすぐにいい変化が見られたものもありましたが、反応がないものもありました。そして反応がなかったものは「なぜ反応がなかったのか」「こんな遊びで関係を作るといいかも」と考え、教えていただき実践する中で、子どもとの関係がぐっと縮まり、以前よりも子どもの笑顔が増えたように感じました。これらのことから、日頃の遊びから子どもの姿をよく観察し、一人ひとりの子どもにあった保育を実践することの大切さを学びました。

[その後の様子]

- ① 外に出られない日は個別に外に出る時間を作ったり、所内を散歩したりし、本児の気分転換になっている
- ② 布団に入ってから30分以内に寝付き、1時間ほど眠ることが増えた
- ③ パーテーションを使用すると泣いて嫌がる様子がある不安感があると考え、使用を中止する

Aちゃんはこんな子！

- ・知的好奇心が旺盛で、物知り
- ・言葉をよく知っていて、物事の説明が上手
- ・保育者のケガを心配したり、お手伝いをしようとしたりと、思いやりがあり優しい
- ・ワミーが好きで、集中してよく遊ぶ
- 友達の作ったものを参考にしたり、「どうするの？」と聞いたりしながら、自分で作っている

気になる姿

- ・身の回りのことを自分でしようとしない

なぜ？

- ・朝の会など座っている場面で立ち歩く
- ・突然大きな声で叫ぶ etc.

他にも…

クラスは…

- ・4歳児クラス
- ・男児13名女児5名
- ・全体に、追いかけあい、ちょっとかいの出し合いでトラブルになることもあるが、友達が好きで、関わりを持ちたい姿がある



必要性を感じられるように

- ・身の回りのことをした後は、好きな遊びができるなどを知らせる
- ・何をして遊びたいか聞き取り、「早く片付けて、○○をして遊ぼうね」など声をかけて、期待を持って身の回りのことをできるようにする
- ・身の回りの片付けについての手順表を用意し、次にすることが分かるようにする

具体的な援助・手立て

- ・「一緒にしよう」と語ったり、「先生とどっちが先にできるかな？」など、ゲームのように楽しめるようにしながら、身の回りのことをしようとする気持ちを持つようとする
- ・自分でできたときには、「自分でできたね」「早かったね」など頑張りを認めていく



保育者と関わりを持ちなが

-
- ・「片付けたら何してあそぶの？」と聞くと、「○○するから片付ける！」と意図的に片付けたり、「Aちゃんのほうが早い！先生には片付けさせないぞ！」と保育者との競争を意識して自分から片付けようとする姿が出てきた。
 - ・保育者が関わりを意識し、朝の会などでそばについていくことで、立ち歩いたり、気を引こうと大声をあげたりする姿も少なくなっていました。Aちゃんの行動全般に大人との関わりを求めていたことが感じられた。

研究会で学んで…

- ・子どもの姿を「なぜ？」で解きほぐし、援助を考えていくことはとてもわかりやすかった。
- ・一方で、個人の見方は限定的だが、いろいろな人の見方や意見を聞くことで、気付くこともあります。他職員との意見の交流が子どもを理解することにつながっていくことを感じた。
- ・また一つの考え方・方法に固執するのではなく、よりその子どもに合った支援をしていくためには、常に「なぜ？」を探していくことが必要と感じた。

○クラスの概要

3歳児クラス 24名 保育士3名



☆本児の強み・好きなこと☆

人と関わることが好きで特に小さい子や友達には優しく接する。人形やぬいぐるみをあわせ話す遊びやぬいぐるみで遊ぶこと、歌や音楽が好き。



【気になる事】

朝の会の時に自分の席(後方)に座ろうとせず、
好きなスペースで遊んでいる

【なぜ?①】

- ・座る場所が落ち着かない
- ・好きなスペース(床の近くの間の空間)
にいたい
- (その席についていた意図)
一番後ろの席だと保育者がつきやすい
かな?

【なぜ?②】

- ・朝の会に興味がない

【具体的な援助・手立て①】

一番前の席に移動する

【具体的な援助・手立て②】

歌や音楽など本児の興味があ
ることを冒頭に取り入れる

【その後の様子】

- ・特に混乱することなく自分の席を覚える
- ・朝の会で使用する支援ボードの目の前の席になったので、支援ボードを見て声を出し参加できるようになった。

【その後の様子】

- ・「ミドミドミソソ～」を早くピアノで弾くと本児だけではなく他の児も急いで席に座るようになった。現在はそれに合わせて手拍子をしたり足を鳴らしてみたりする遊びをクラス全体で楽しんでいる。
- ・ピアノの音が何回鳴ったか当てるゲームを冒頭に取り入れると本児も楽しんで参加をしている。

【気付いたこと】

「なぜ」でグループで考えたことが本児の思いと合致していたからこそ支援がうまくいったのではないか。また片付けが終わってもなかなか座れない姿が他児にもあったが、遊びの中で楽しんで座ることができるようになり活動の流れがスムーズになった。しかし本児は飽きてきている姿もある。

【研究会全体を通した考察】

沢山の会ったことのない子の支援を考えていくことは難しかったが、「なぜ」を一番に考えてから支援を考えることで、支援を考えていきやすくなかった。また客観的な視点からのアドバイスをもらえて楽しくありがたかった。支援はうまくいかないことももちろんあるが、一つ一つの行動をじっくり理由から考え実践して振り返る事が子どもに寄り添うということなのではないか。またその気持ちは子どもにも伝わり、子どもの「だいすき」につながっていくのだろうと感じた。

気になる子どもの名



- ・3歳児 A児
- ・登所して部屋に入ると、リュックを置いて朝の用意をしないまま奥にある畳に寝転がってくつろいでいる。「次は何するの?」と聞くと「朝の用意」と答えるが「じゃあ朝の用意、一緒にしよう?」と誘っても「まだしない~」とそのままくつろいでいる。
- ・給食を食べ終わると、片付けずにそのままぼーっとしたり、先に食べ終わって着替えて遊んでいる子の遊びが気になり、立ち歩く時がある。
- ・車や電車等、乗り物が好きでよくブロックの車を走らせて遊んでいる。
- ・自分の好きな遊びのために、頑張ることができる時もある。

その後の様子

- ・気持ちに左右されることもあるが、朝の用意も、給食後のやることも保育者が手順表を渡すと、すぐに取り組むことが増えた。
- ・最初は1つの手順が終わると、マグネットを置いていたが、慣れてくると全部終わってからまとめて置くようになった。
- ・朝の用意では、全部終わると保育者と一緒にハイタッチして喜びながら好きな遊びへ向かっている。

気付いたこと

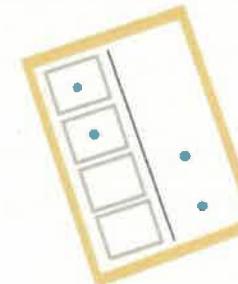
- ・視覚的な情報(写真等)の方が入りやすい。
- ・手順を分かっている様子もあるが、手順表がある方が取り組みやすい。
- ・手順表を使うことで、次にやることへの気持ちを切り替えるきっかけになっている。

なぜ?

- ・朝の用意や給食の片付けが面倒くさいから。
- ・朝の用意より畳でくつろいでいる方が楽しいし、落ち着くから。
- ・先に着替えて遊んでいる子の遊びが気になり、自分も遊びたいから。

具体的な援助・手立て

- ・朝の用意や給食後にやることの手順表を用意し、朝の用意や給食後の片付けから着替えまでの見通しがもてるようになる。
- ・手順表に使う図を、写真にすることで視覚的にも分かりやすくする。
- ・1つの手順が終わったら、その手順の写真の上にマグネットを置くことで、視覚的に終わったことが分かりやすくなるようになる。
- ・最初は保育士と一緒に、手順表を使って取り組み、少しずつ慣れてきて自分からしようとしている時は、傍で見守るようにする。
- ・最後までできた時には、大いに褒めて自信がもてるようになる。



考察

この研究会に参加したことで、改めて困り感のある子どもへの関わり方や支援へつなげていくための視点や考え方等を学ぶことができた。その子への支援を考える時に、どのような支援をすればその子の困り感を少しでも軽くできるのか、悩むことが多かった。しかし、子どもの行動から「なぜ?」とその子の行動の原因や背景を考えることで、その困り感を少なくする支援への糸口が見えてくることや、新たな視点に気付けると知ることができた。また、グループで様々な事例を検討することで、他の考え方を知ることができたり、様々な困り感を持つ子どもに対しての支援の方法を学ぶことができ、これから支援へつなげていきたいと感じた。

クラス概要

4歳児クラス

22名(女児13名 男児9名)

保育士2名

子どもの姿

5月中旬よりA児は登園してクラスに入ると玩具の棚の上に登り、大声を出したり、玩具を投げたりするようになる。(4月は室内で好きな遊びをして落ち着いて遊んでいた)保育者が止めに入ると、それに怒り、泣き叫ぶ、蹴る、殴るという行動をする。友達にも同様、注意をされると瞬時に怒り手が出るなど室内で全く落ち着きがない。友達が積み木やレゴをしていると机の上に乗って壊すなどの行動も見られる。(他クラスで過ごすとそのような姿はない)

なぜ??

- ① 保育者に自分だけを見て欲しい、思いを受け止めて欲しい。
- ② 友達から注目されたい、認められたい、負けたくない。(棚の上に登っている時も他児の反応を気に掛ける姿がある)
- ③ 衝動性があり、気持ちのコントロールが難しい。



具体的な援助・手立て

① 園内にて安心できる居場所づくり

興奮状態になったときには別室に行き、行動に対して注意することはせず、場面転換することでいったん気持ちを落ち着かせる。事務所や他クラスの協力を得て、ゆったりと対保育者で遊べる空間・時間を確保する。

② 友達に注目される機会を設ける。つながれる遊びを探す。

朝のサークルタイムにて保育者が質問した時に一番に指名し、みんなの前で褒めて他児から注目される機会を作ったり、戸外にて友達を巻き込みながら一緒に楽しんだりする。

③ 十分に身体を動かし、身体と気持ちのバランスを整える。

戸外で身体を十分に動かして発散する機会をつくる。

その後の様子

2ヶ月ほどは室内にいることが難しかったが、7月の下旬より友達と少しづつつながれるようになってきたことをきっかけにクラスで過ごす時間が徐々に伸びていった。衝動的な特性はあるが、保育者にも友達に対しても瞬発的に手が出ることが徐々に減り、今では友達とも遊びを通してつながれるようになる。

気付いたこと

数ヶ月を通して、担任2名と本児との長い戦いだった。頭を抱えることもあったが、一番不安で辛いのは本児であるということを常に念頭に置き、担任同士で支援の仕方を共有し、園全体にも投げかけ協力を得られたのは大きかった。些細な視線や行動を細かくみること、そこにあるA児の本当の思いや願いを見つけること、そういういった基本的な部分に改めて立ち返ることができ、A児を通して保育者自身も大きな学びとなった。

研究会を通して学んだこと

いろんな視点からものごとを共有し、意見を交換することはとても大事なことだと思いました。他園の先生方や木曾先生含め、そんなアイデアもあるんだと勉強になりました。子どもの行動に見える心の声を探りながら、保育を楽しんでいきたいと思います。一年間ありがとうございました。



子どもの姿



- ・自分の身体の前後が分からぬ
→間違えたくない
- ・自分の気持ちの伝え方が分からぬ
→伝えなくても察してほしい

4歳児 男児 クラス14名

◎困ったことがあると自分の要求が言えず固まってしまう。

- ・着替えの服の前後が理解できず保育者が手伝うまでその場で固まってしまう。
- ・トイレに行きたいことを言い出せずギリギリまで我慢して漏らしてしまう。

具体的な援助・手立て

- ・服の手を持つところにクリップを付ける。
持ち手を持って被って前後を間違えないようにする。
- ・背中が分かるような遊びを取り入れる。
- ・間違っても大丈夫と言うことが伝わるように保育者が
あえて間違えてやって見せる。
- ・助けてカードを用意してカードの使い方から伝え、困った
ときにカードを使えるようにする。



その後の様子や気付いたこと

- ・運動会時期で丁度手押し車などの運動遊びを実践していたこともあり、同じ流れで友達同士で背中をくっつけてみたり友達の体を触ってみる機会を作った。
- ・服にクリップを付けて目印にしていたが次第に服のタグを自分で見て意識出来るようになり、自分でも着れるようになった。また、困っているのを友達がよく見つけてくれるようになり、声をかけたり周りの子が気にしてくれるようになる。
- ・「ヘルプカード」「トイレ行きたいですカード」を作りカードを保育者に渡して助けてもらうという、一連の流れを現在練習中。カードがあることで本児も安心出来るようだが、
使える時とそうでない時があるので継続が必要。

実践研究を通した考察

様々な園の事例などを聞いたり一緒に考えることは普段ない機会であり、自分の事例も聞いてもらい一緒に考える中で第三者の意見や見方を聞けるのはいい経験になった。同時に自分の考えを改めることができた。「なぜ」を一度振り返り考察する中で本当に子どもが直面している問題を明確にし、また色々な角度で物事を見ていく重要さを実践を通して気付くことができた。

実践報告

A児

子どもの姿(2歳児)

- ・友達を押す
- ・友達との距離が近く友達を触る



なぜ?

- ・何らかの不快な気持ちから悪気なく押す
- ・友達に興味があり、関わりたいという気持ちから触ってしまう

具体的な手立て

- ① 体を使って遊ぶ
- ② 1対1の遊びから保育者との関係づくり
- ③ 好きな遊びを少人数で遊ぶ



考察

★職員間で子どもの理解、なぜ?具体的な手立ての共有

子どもの姿を否定的に捉えずまずは、その子どもの困り感やなぜその行動をとったのか、の観点から肯定的に受け止めることが大切である。今現在の姿に焦点を当て具体的な手立てを職員間で(クラス間に留まらず)共有し子どもの表情の変化や日々の少しずつの成長を見逃さずその先にあるその子どもの成長を見守っていくことを大事にしていく。

★進級し次のクラスになっても支援の継続が大切である。

職員の考え方や支援の悩みを聞いてもらい、意見が言い合える職員関係が重要である。

★支援児が小学校入学後の環境と保育所生活での差はないのか?小学校との環境面での連携も重要視しなければならない。

①体をしっかり使っていろいろな遊びを経験することで体の使い方が分かっていく。

友達を押すことが減る

楽しいねできたね

共感肯定

②短い時間でもゆっくり関わる時間を意識する。ふれあいあそび、どっちかなあそびなどを続けていくうちに言葉のやりとりが増えてきている。

受け答えができるようになる

③本人の好きな遊びを大切にしながらできる限り集中できるように遊びの環境を整える。そうすることによって好きな遊びが増えてきている。

できた作品を褒めるといい表情で喜ぶ

その後の様子、課題

友達に対する気になる行動が減ってきた。

課題

その場に応じた声の大きさのコントロールや衝動的な行動には課題が残っている。

- ・室内遊びでは玩具を手に持って歩き、近くにいる友達に上か

具体的な援助

- ・全身を使った遊びを意識して取り入れる。
- ・保育者と1対1での時間を作る。
- ・同じ空間で少人数の友達と過ごすことから始めていく。

その後の様子

- 戸外遊びや運動遊びでは友達に覆いかぶさる姿はない。順番待ちや体操では、友達に触る・ぶつかりに行くことがある。
- 保育者と1対1で遊ぶことで、玩具を持ち歩くことが減りブロックやパズルなどで遊ぶ時間が増えた。
- 少人数の空間では友達との関わりも増え、言葉のやりとりやブロックや積み木と一緒に作り喜ぶ姿もある。

気付いたこと

遊びに集中していると、友達に覆いかぶさることはなかった。保育者と1対1で遊ぶことで、玩具の遊び方や楽しさが分かり座って遊ぶ時間が増え、友達と関わる姿もあった。友達自身より友達の遊びに興味をもつようになってきている。友達と一緒に遊びがしたいが玩具を触り取ってしまうこともあるので、遊びのルールや友達の気持ちを伝え、仲立ちしながら言葉での伝え方を知らせていく。また、友達と一緒に遊びを楽しめるように援助を考えていく。

実践研究全体を通した考察

子どもの気になる姿だけでなく、前後の子どもの姿をよくみて“なぜ?”と考えることが大切だと学んだ。主観で見ず、客観的に捉えながら子どもの困りを見つけ援助できるようにしていきたい。“なぜ?”を考えることで、今まで見えていなかった子どもの姿や援助方法が見えてくることもあるのだと感じた。グループで子どもの姿を共有し話し合うことで、いろいろな視点や援助を学ぶことができた。保育者間で話し合いや相談することで、子どもそれぞれにあった援助を見つけることができると思う。

気になる姿への実践研究まとめ

〈子どもの姿〉

- ・棚の上にのぼる。
- ・棚の上に立つ。
- ・棚の上に歩く。



〈なぜ?〉

- ・高いところにのぼることが楽しい。
- ・遊びのうちのひとつになっている。
- ・身体を動かす遊びがしたい。

・1歳児 男の子
・クラス 子ども12名
保育者 3名

〈援助・手立て〉

- ・のぼってもよい環境を作る。
 - …以前のぼっていた棚と同じくらいの高さの坂を遊びに取り入れ、身体を動かして遊べるようにする。
- ・のぼらずに済む環境を作る。
 - …棚の向きを横から縦にして設置し、棚の高さを変える。



〈その後の様子・気づいたこと〉

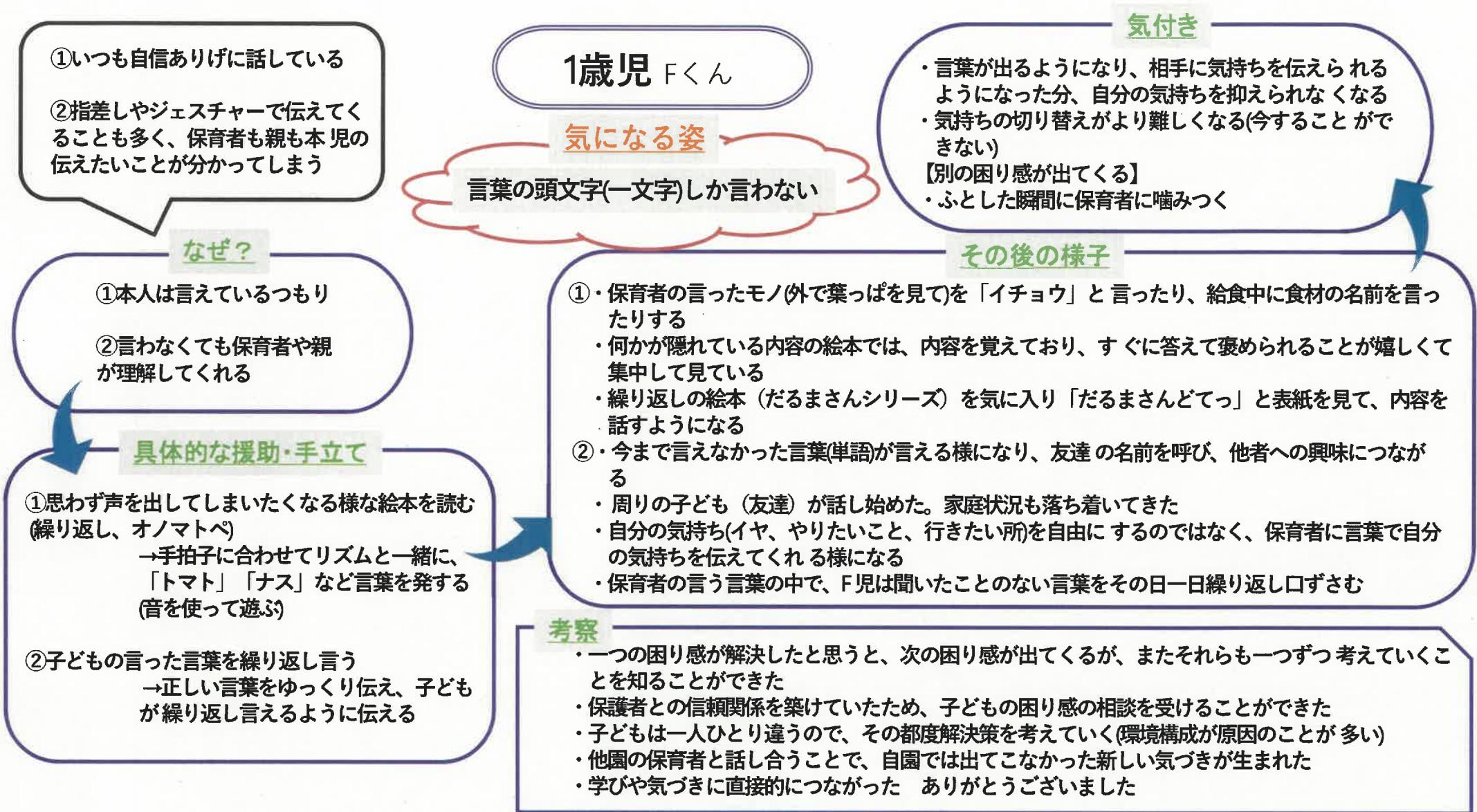
- ・坂ののぼりおりで十分に身体を動かして遊んでいる。
- ・縦向きの棚にはのぼれないで、のぼることはなくなった。



〈実践を通した考察〉

本児はまだ1歳児ということもあり、「〇〇しません」ではなく自然とその行動をしなくなるような環境に変えたり、他の遊びに変換してあげたりすることで実践研究後の姿につながったと感じる。

担任以外の保育者に相談することで、今までに思いつかなかつた「なぜ?」が出てきて、子どもの気持ちに対して更に深く考えられるようになったり、新たな手立てを実践したりすることができた。



— 特別支援教育・保育研究会 実践研究のまとめ —

●対象児について●

- ・3歳3か月の男の子
- ・特性：自閉傾向がみられる。自我の表れと共にこだわりも強くなっている。

●気になる姿●

手に持っている玩具を手放して次の行動に移るときに気持ちが崩れてしまう。

〈例〉戸外に向かう時に手に持っている玩具を棚に置いていくよう促すと、泣きながら自分で置くが、その後なかなか気持ちが落ち着かず、戸外準備への参加や散歩で歩くことが難しくなる。



牛乳パックでつくった玩具で、手に握りしめられるサイズのもの

●なぜ？●

- ①持っていることで安心する。
 - ②次の行動＜今の遊び
 - ③置く必要性を感じていない。
 - ④次の活動が漠然としている。
- *その後の様子から、玩具を持ったままであれば準備する場所に自らくること、玩具を持っていない状態でも移動する際には探して持っていくこうとすることから②④は当てはまらないと感じた。

●その後の様子・気付いたこと●

・その後も1ヶ月以上この玩具へのこだわりは続いている。玩具が自分の手が届く範囲から離れる、見えなくなることは嫌がるが、そばに置くことはでき、「ここにおこうね」と言うと自ら置き、着脱など両手を使う動作にも意欲的に参加している。

・同じものを複数持ちたがることが多いが、散歩など戸外活動の時は一個だけ持つように促すと、納得している様子で機嫌よく次の活動にも参加できている。

・他の遊びに気が向くと、いつの間にか手放していることも多く、安心して遊びを繰り広げる姿が増えている。

*今後もいろんなこだわりが出てくるかもしれないが、この事例を思い出して、こだわりをやめさせることにこだわらず、より大きな枠組での成長に目を向けていきたい。

●具体的な援助・手立て●

・本児の特性や心情を鑑みたときに、本当に手放さないといけない場面・物であるかを考えて、持っているままでも可能なら持ったまま活動を続ける。

・安心感の中、自ら手放して遊びに向かえるように興味・意欲に寄り添って援助をする。

◆実践研究全体を通した考察◆

この研修を終えるに近づき、この数か月間を振り返ってみると、とにかく「インクルーシブとは何だろう」と考え続けた時間だった。保育の中で「この環境、この援助はこの子たちにとってはいいけど、この子にとってはどうなんだろう…」と悩むことが増え、いつの間にか自分が見えない線引きをたくさんしていることにも気付いた時間だった。この考え方方が次第に保育以外の場面でもたくさんよぎるようになり、自分のまわりにいる人に合理的な配慮をするための努力へつながったり、自分自身を始めとする一人ひとりの特性や気質に少し受容的になれたりしたのではないかと思う。いろんな壁にぶつかったり、ジレンマに陥ったりすることもあるが、今後も「インクルーシブとは何だろう」と考え続けていきたい。

研究会に参加して～気付きや学んだこと～

- ・子どもの“気になる姿”を「なぜ」を手掛かりに解きほぐし、視線の方法を模索する考え方は、とてもわかりやすかった。「なぜ」を理解するために、子どもの特性を知ることが大切だと感じた。
- ・子どもの困り感は一つではない。一つひとつ紐解くように解決へ向けて改善策を考えていく大切さを学んだ。
- ・「できない」に目を向けることが多かったが、「できる」こと、「良いところ」に視点を変えることに意識していくことが大切だと学んだ。
- ・「保護者支援」に苦手意識があったが『目の前の子どもの対応をより丁寧にしたらいい』という講師の言葉や保護者の不安な気持ちに共感することが大切ということを学び、以前よりも落ち着いて保護者支援ができるようになった。
- ・子どもの姿をしっかりと捉えることも大切であるが、一人では偏った考え方も出てくる。日頃から職員間で相談や話し合いができる関係づくりが大切だと思った。
- ・インクルーシブ保育とは何か、日々の保育でできているのかを考えなおす機会になった。

グループでの事例検討に参加して～気付きや学んだこと～

- ・一人で考えるのではなく、複数人で考えることで、その子どもに合ったよりよい援助や手立てを導き出すことができるのだと改めて感じた。
- ・子どもにとってプラスになることを考え、たくさんアイデアを出し合うことができた。実践後の報告を聞き、良い方向に進んだことを喜びあったり、次のステップと一緒に考えたりできたのは嬉しかった。
- ・子どもの姿を伝える際に、子どもの行動をマイナスに捉えていることが多いので、その子どもの困り感を伝えるなど、保育者側の視点を変えていく必要があると感じた。

～講師講評～

参加者のみなさん、1年間ありがとうございました。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で断念せざるをえなかった対象児の観察も、今年度は5園にご協力いただき、無事に実施することができました。グループワーク等でも活発に意見交換くださったことで、非常に深い議論ができたと感じます。なにより、日々お忙しい中でも、研究会での学びを意識して実践を積み重ねてくださったみなさんに改めて敬意を表します。

今年度は私自身も「インクルーシブ保育とはなにか」「子どもにとってよい保育とはどういうものか」を、参加者のみなさんと一緒に悩んだ一年でした。理念や理想として「インクルーシブ保育」「誰一人取り残さない保育」「一人ひとりを大切にした保育」などを掲げていますが、実際にそれを実践するには様々な困難・課題があります。すでに多様な課題を抱えながら精一杯に保育をしておられる先生方に、理想を語ることしかできない自分の無力さも痛感しました。

しかし、最終の発表では、参加者一人ひとりが晴れ晴れとした表情で自信をもって発表しており、その姿から1年間共に悩んできたことの意味を見いだせた気がしました。講師として「○○することが大事」などと言ってしまいがちですが、「(いついかなるときでも)○○でなければならない」ということはないと思います。特に、日々変わりゆく保育現場では、その時その時に「何を大事にするべきかを悩み、考え続ける」ことこそが保育の専門性であり、やりがいもあると学ばせていただきました。

とはいっても、悩み、考え続けていくことは、苦しいことです。だからこそ、どうか一人で抱え込まず、今回出会った研究会メンバーや職場の仲間、そして何より子どもと語りあってください。「ひと」はみな多様です。互いの違いを尊重し、その違いを活かしあうことで、子ども一人ひとりの「できた、わかった、たのしいね」を支えていける保育になることを心から願っています。

木曾 陽子